

## アナログレコード再生の細々としたこだわりの工夫

5年前にレコード再生を再会しました。最初はとまどい、そしてチョンボの連続でした。最近になってようやくどうにか慣れてきたかなあと感じています。

その昔、まだCDが登場する以前は私だってアナログレコード再生をしていたわけです。しかしレコードを鳴らし切っていたとか「ウーン、これはイイ」という実感を持った記憶は全くありません。多くの方がいったんはオーディオの世界に入り、結局そこから出て行った理由のひとつがそれかもしれません。

これは例えですが、私は決して市販車を改造してレーシングカーにするような事をアナログレコード再生の場でやろうとしたわけではなく、やったわけでもありません。しかし今に至るまでには幾つか重要なポイントがあったように思います。

以下、まずは事の成り行き順にそれを述べてみたいと思います。

まずはカートリッジシステムです。つまりカートリッジ、ヘッドシェル、リード線の選択と組立です。

多少幅広くはやりましたが、私の聴覚にとってはステレオカートリッジにしてもモノラルカートリッジにしてもオーディオテクニカの製品が合っているようです。

仮にデノンの103系を使うのであれば、103より少し高いのですが、103Rが良いと思います。オルトフォンのカートリッジについては針先が $25\mu\text{m}$ のモノラルカートリッジを除いて、それだけでなくはならないはっきりした理由は見出せていません。

さてカートリッジシステムについては、素材もさることながら、組み上げ方については工夫をしています。その方針ですが、音振動については「散らす」ということを基本にしています。ヘッドシェルに付属するゴムワッシャをドライカーボン0.5mm厚に替え、場合によっては必要となるヘッドシェルとカートリッジの間のスペーサーも0.5mmか1.0mm厚のドライカーボン製にしています。

この考え方はトーンアームの共振対策についても同じ。またターンテーブルシートもゴム製からドライカーボン製に替えています。ゴムとレコードの素材である塩化ビニールの音速がほぼ同じなので、桁違いに音速が速いドライカーボンを使うわけです。リード線についてはZYXのモノが良いと思っています。理由は材質が一般的な6Nの銅で線の長さが30mmと短いからです。

次はターンテーブルです。やはり回転軸付近で水平を確保することがよいようです。というか、キャビネットの上面が平らではないので、それしかやりようがありません。キャビネットについては箱タイプとソリッドタイプの両方を使用していますが、

スピーカーからの振動対策（＝ハウリングマージンの確保）さえちゃんとしていれば、どちらでもいいと思います。箱タイプは若干低域が膨らむかもしれませんが、むしろ重要視したいことはキャビネットの脚部です。高さの調整機能は無論必要ですが、日本製品のように脚部にグニャグニャしたインシュレーション機能があるとハウリングマージンを確保する上で助かります。

さらにトーンアームです。これを重要視する人もいて（長さなど）、それはそれで好き好きなのでしょうが、私の場合は針先で水平（＝垂直トラッキング角度）がとれているかどうかを重要視しています。そうはいつでも普通のレコードと重量盤では厚さが違ってくるので、針先の水平をどちらに合わせるのか、あるいは中間にするのかを選ばなければなりません。

またやっかいな事は針先のアーム軸回りの傾きです。これはユニバーサルタイプの場合はユニバーサルジョイント部分を留めているネジ2本をアームの下側から緩めて多少調節することが可能です。またカートリッジシステムをアームに取り付ける際には多少のガタがありますので、その締め付け方を調節します。うまくいったかどうかはヘッドシェルの上に小型気泡管を載せて確認します。ただしこの小型気泡管の感度は悪いので、これで傾いているようだと相当ダメだということです。気泡管の重さ(0.71g)の影響については一応無視してもよいことにします。

ともかくにも垂直・水平をきちんと整える、これが基本です。

次は電氣的な問題です。特にノイズ対策は何としてでもやらなければなりません。元々プリメインアンプに内蔵されているフォノイコライザーの場合、独立型に比べるとS/N比が良くありません。MCポジションで音量を上げるとそれなりのノイズが出て来ます。MMポジションの場合は増幅度が低いのでおそらく大丈夫です。

問題はそうではないノイズです。これについてはフォノケーブルのアース線をトーンアーム側で外すか、アンプ側で外すか、あるいは両方外すか試してみてください。かなりの確率でノイズが収まります。ただし理由はよく分かりません。こればかりは個別のシステム対応であれこれ試してみるより他に方法がありません。ユニバーサル・トーンアームの場合は接点部分の接触不良に起因するノイズも有り得ます。

またカートリッジのコイルの材質、リード線の材質、アーム内部配線の材質、フォノケーブルの材質ですが、6Nの銅ならそれで揃えることが無難だと思います。

ただし何処かに銀線が入ってもそれほど問題にはならないと思います。何しろ途中で金メッキの端子が何箇所もあるからです。

関連機器の電源コードについては全て接地側を接地側に挿すということだけでよいと思います。とりたてて音がよくなるわけではありませんが、ノイズが減って？静かになるという印象です。

いずれにしても電氣的なトラブルを予防するためには、特に微弱な信号が流れている部分に存在する接点の管理が大切だと思います。ことに接触不良についてはシステム全体のパフォーマンスに与える影響が大きいので何とか工夫してほしいと思います。接点改良剤については非スプレー式の製品をお勧めします。スプレー式のものは有機溶剤がゴム系の絶縁材を傷める可能性があるからです。

さて、アナログレコードの再生が CD の再生と大きく異なる点ですが、CD の場合では考えられないような大音量（＝ボリューム位置が 12 時）での再生も可能にしておく必要がある事です。

何故かという、アナログレコードに記録されている音圧レベルが大きくばらついているからです。普通の音圧で制作されているレコードがボリューム 11 時の位置でほぼマックスだとします。これに対して音圧が低い盤の場合はボリューム位置を 12 時にしなければならず、逆に音圧が高い盤の場合（再生する側からすればこちらの方がラク）、ボリューム位置は 10 時で OK です。

ボリューム位置を 12 時にしても破綻しない安定したアナログ再生システムを実現することは結構大変なのです。ギリギリの線を狙うので注意深さが要求されます。

要するにアナログ再生システムの難しさは、レコード盤に刻まれた音圧レベルが違い、厚さ（＝重さ）が違い、レコード溝の切られ方が違い、年代によってはイコライザー・カーブが違い、モノ盤とステレオ盤では溝が違い、さらに傷があったり盤自体が反っていたりすることに起因します。

「何でも来い！」と言いたいところですが、そうはいきません。

大雑把な言い方ですが、昔のいわゆるオリジナル盤にうまく対応した再生システムでは現代の再発盤をうまく鳴らせないかもしれません。逆もまた然りです。

またお金を掛ければレベルの高いシステムが実現出来るのか？という、お金よりは細かい点での工夫の積み重ねの方が効いてくると思います。概して高価な機器はシビアな使い方を要求します。やはり失敗もして経験値を上げていかないとイケません。それしか方法はないようです。評価が高くて高価なカートリッジを導入したらガバッとサウンドの質が上がるのか？そんな甘い事はありません。そのカートリッジが本来の実力を発揮出来る条件を整える、それでようやくシステム全体の能力向上に貢献出来るということになります。この条件を整えるという作業はかなり大変です。覚悟をしておくべきです。

アナログレコードを受け入れるための再生システムについて、絶対に見逃してはいけないことが針先のコンディションです。

目視で付着物がないかどうか調べます。もし黒っぽい付着物があれば、水で湿らせた綿棒をゆっくり回転させるようにしながらこれを取り除きます。

単純な綿埃のようなモノであれば、カートリッジに付属している小さな丸い刷毛を使います。これをどのようにうまく活用するかを工夫するとよいでしょう。

最後に、主役のレコードの維持管理についてです。

私の場合、レコードは全て、新品だろうと中古だろうとクリーニングをします。基本は手回し百回です。実質は約半分の 50 回転。

クリーニング液は当初のモノに純粋エタノール、純水、写真フィルム用界面活性剤を適宜継ぎ足しています。

このクリーニング液に静電気防止剤が含まれていたかどうかは分かりませんが、不思議なことに、クリーニング前には静電気のせいでインナーに貼り付いていたレコード盤が、クリーニング後にはスルスルと滑るようになります。

この全数クリーニングは、勿論レコード盤から可能な限り良いサウンドを引き出すための作業ですが、もうひとつの重要な目的は針先の保護ということです。

ローテーションに入れて何回か再生された（＝針通しした）レコード盤を再生すると針先はピカピカのまま、汚れの付着は皆無です。

またレコードの保管についてはアウター無し、インナーは角丸の中空きで平積みと決めています。これはレコード再生にまつわる煩わしさをなるべく排除したいからです。

平積みはジャケットを傷めると心配する人もいますが、その対策としてシリコンスプレーを使ってごく薄い保護膜をジャケット表面に付けています。要するに滑り易くしています。平積みについては効用もあって、円周部分が波打っている盤、すり鉢状に反っている盤は 1 年もすると大体平らになっています。再生ローテーションにつれて平積みされる位置が変わるのでそれも盤にとってはよいようです。

盤の反りは難題です。某オーディオ大家が某オーディオ評論家の評価を真に受けて某メーカーの加熱タイプの盤反り矯正機器を使用したところ、大切なレコードをかえって傷めてしまったと激怒していました。やはり 1 年位掛けて常温で修復する方が無難です。

レコードの維持管理の締めくくりはジャケットの修復です。中古盤のジャケットは傷んでいる事があるし、新品の再発盤でも（ボール紙の品質が悪いせいで）開口部の縁がボロボロになってくることがあります。

補修材としては片面が粘着材付きの透明フィルム（「カバーフィルム」 NICHIBAN など）を用います。また背表紙部分に細かいひび割れが出ている場合、スティック糊を爪楊枝で適量削って補修します。ジャケットの傷みについては早めに補修すべきだと思います。

アナログレコードの再生を再会してはや 5 年、思えば遠くへきたものです。

一応は何とかなっています。しかし 1 枚のレコード盤から引き出せるサウンドの風景は実にいろいろで、いまだ全貌をつかめているわけではありません。

例えばピアノトリオのアルバム、この中にピアノソロが 1 曲入っているとします。

そのトラックの音量ははたして他のトラックと同じでいいのでしょうか？

もし現実に有り得ないようなピアノの音量になったとしたらそれはいかにも不自然です。同じようなことはベースの音量についても言えます。トーンコントロールあるいはイコライザーをどう設定するかを含めて、たった1枚のレコードでも再生の仕方に唯一無二の正解なんてないと思われま

さて、ではもう一度、内容が重複する部分もありますが、事の成り行き順ではなく、項目を整理して（忘れ物がないよう）改めて要点を述べてみたいと思います。

- 1 レコード再生については音量と帯域間バランスの調整が何より肝心です。  
このためにまずプリ（メイン）アンプの音量ボリュームとトーンコントロールを活用します。煎じ詰めればレコード再生のためのイコライザーカーブも帯域間バランスをとるためのモノですから、プリアンプのトーンコントロールである程度代用が出来る場合だってあります。  
また、大音量再生も出来るように条件整備をする必要があります。
- 2 レコードについて、まずは新品の再発盤の利用をお勧めします。  
いろいろな面でリスクが少ないからです。オリジナル盤である必要はありません。再発盤でも帯域間バランスを調整すればオリジナル盤に近いサウンドが現れるかもしれませ
- 更に言えば、再発盤はごく普通の再発盤でよい、つまり高音質盤だの重量盤だの必要は全くありません。重量盤などはむしろ弊害の方が大きいと思います。  
また中古レコードについては、足を運べる店で状態が良くて妥当な価格の品物を継続的に購入することをお勧めします。米国のネット販売などからの購入は品質と価格の面でリスクが高いと思います。  
新品だろうと中古だろうとレコードは徹底的にクリーニングしておきます。  
レコードというものはミックスダウン・エンジニアの考え次第で、これが同じアルバム？という位サウンドの風景が変わります。それはそれとして自分の聴きたい風景を作り出す手間を惜しんではいけません。レコードに収められたサウンドは素材だと考えた方がよろしいと思います。どう料理するかはレコード演奏側の責務です。
- 3 カートリッジシステムについては、いろいろ試してみるのも結構ですが、どれでもそれなりに鳴るはず

レコードがクリーンで針先がクリーンなら針の寿命は長くなります。大体 1500 時間は期待していいと思います。

- 4 トーンアームについては“as you like”ですが、各種調整が便利な方がラクです。
- 5 ターンテーブルですが、ベルトドライブ方式のベルトは適切なコーティングをすることにより寿命は大分長くなります。

以上